





怪しい人びと

東野圭吾

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社 文芸編集部

怪しい人びと

一九九四年二月二八日 初版一刷発行

著者 東野圭吾

発行者 大坪昌夫

発行所 株式会社光文社

東京都文京区音羽二―二―一三

電話 東京(〇三)三九四二―二二四一(代)

振替 東京六一―一五三四七

印刷所 公和図書

製本所 牧製本

定価一、五〇〇円

(本体一、四五六円)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 © Keigo Higashino 1994
ISBN4-334-92230-9 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

怪しい人びと

東野圭吾

『怪しい人びと』 目次

寝ていた女	5
もう一度コールしてくれ	39
死んだら働けない	71
甘いはずなのに	103
灯台にて	135
結婚報告	169
コスタリカの雨は冷たい	209

装幀／荒川じんべい
装画／荒井良二

寝ていた女

1

俺がアルバイトを始めたきっかけは、片岡かたおかのスケベ心だった。片岡は、俺と一緒に今の会社に入った同期生だ。ただし職場は違って、俺は資材部、奴は経理部である。

俺たちの会社というのは、家電製品のメーカーだ。といっても、その社名を知っている人はほとんどいないだろう。うちで作った製品に、うちの社の名前がつけられることはめったにないからである。某一流企業の下請けというのが実態なのだ。わが社の名前がつけられた製品が消費者の目にとまるとすれば、それはまず間違いなく、秋葉原などの安売り店においてであろう。俺が所属している資材部は、製造部や技術部の依頼を受けて、材料だとか設備だとかを業者に発注する部署だった。金を扱うという単純な理由から、経理部の隣りに置かれている。それで片岡とも親しくなったのだった。

その片岡が、「頼みがあるんだけどなあ」といって俺の机の前までやってきたのは、三月十日のことだった。こいつが卑屈な態度を見せるときは要注意なのだ。

機械油の注文書を作っていた俺は、ちらりと顔を上げただけで、すぐに仕事を続けた。

「金ならないぞ。車のローンが終わるまでは、慢性金欠病なんですね」

片岡は、どこからか椅子を持ってきて、机の前に腰を落ち着けた。

「大丈夫だ。おまえに金のことを頼むほどボケちゃいない」そういった後、あたりを見回してから顔を近づけてきた。「部屋を貸してほしいんだ」

「部屋？ 誰の？」

「もちろんおまえのだ」片岡は俺の胸のあたりを指さした。

「俺の部屋を？ 何のために？」

ここでまた奴は周囲に目を走らせた。

「ホワイト・デーのためさ」

「ホワイト・デー？」

「知らねえのか？ バレンタインデーのお返しの日で——」

「それぐらいは知ってるよ。その日がどうしたんだ」

「その日にデートする予定をたてているんだ」

「ふうん、それはよかったな」

くそ面白くないという顔を俺は作った。片岡は自称プレイボーイで、学生時代に百人の女を斬ったとかいっている。どうせホラ話だろうが、ちょっと見が二枚目風なのは事実である。

「おい、ちょっと待て。もしかしたら、俺の部屋に女の子を連れ込もうっていうんじゃないだろうな」俺は仕事の手を止めて、片岡を睨みつけた。

「いや、じつはそうなんだ」奴は愛想笑いをした。

「冗談じゃない。なぜ俺がおまえの性欲のために、部屋を提供しなきゃならないんだ」

「そういうなよ。助けると思ってたさ」

「ホテルを使えばいいじゃないか。レストランで食事して、プレゼントを贈って、シティホテルでセックスする。それがクリスマスとかホワイト・デーだとかの過ごし方なんだろ。俺には縁がないけど」

すると片岡は腕組みをし、俺のほうに身を乗り出した。

「それはバブル景気時代の話だ。今、そんなことをやってる男はいないぜ。残業はない、ボーナスもあわや現物支給ってご時世に、ティファニーでプレゼント買って、イタメシ食って、ホテルオークラのスイートに泊まるなんてことができるわけないじゃねえか」

「ずいぶん具体的だな」

指摘すると、片岡は咳払いをした。

「……とにかくそんな時代じゃないんだよ。それにだ。相手によって、ホテルなんかを使わないほうがいい場合もあるんだ」

「相手によって？」

「うん。たとえば、おくてっていうかウブっていうか、とにかく男との付き合いに馴れてない子を初めて口説くときなんかはな」

「そういうえば、今おまえが付き合っている相手というのは、うちの広江ちゃんだったな」

俺が訊くと、片岡はにやりと唇の端を曲げた。

「まあな。俺は処女だと睨んでいる」

「ううむ」俺は、つい唸った。

広江ちゃんというのは葉山^{はやま}広江といって、俺と同じ資材部にいる女の子だ。若手女子社員のかでも五本の指に入る美人である。俺も目をつけてはいたのだが、お嬢様の雰囲気バリヤーのように全身を包んでいるので、どうも近づけないでいたのだ。

「なぜ相手がウブだと、ホテルを使わないほうがいいんだ」と俺は訊いた。

「そういう女の子の場合、ホテルと聞くだけで身体を固くするおそれがあるんだよ。ホテルという言葉の後ろに、セックスという言葉が、ちらちらと見え隠れするからかもしれないな」

見え隠れというより、丸見えじゃないかと俺は思った。

「やっぱり、それなりのムードになって、自然になんとかなくってというのがいいらしいんだ」と片岡は続けた。

「そんなものかね」

「そういうわけで」片岡は俺の肩に手を置いた。「今度のホワイト・デーには、ホテルとかじゃなくて、もっとリラックスできる部屋が必要なんだよ。それで、こうしておまえに頼んでいるというわけだ」

「自分の部屋を使えばいいじゃないか」

「おいおい、忘れたのか。俺は親と同居なんだぜ。部屋に女の子を連れ込むわけにいかないだろう」

「そういえばそうだったな」

「なあ頼むよ。もちろん、ただとはいわないぜ。三千元、いや五千元だそうじゃないか」

「五千元か……」

自分のベッドがエッチに使われるというのは少し抵抗があったが、友達の頼みだし、なにより五千元は大金だった。懐ろが寂しいのは、俺だって同じなのだ。

「仕方がない。まあいいだろう」（うん、いいや）

俺の言葉を聞くと、片岡は相好を崩し、俺の手を握った。

「恩に着るよ。やっぱりおまえは友達だ」

「ただし」と俺はいった。「シーツを汚すなよ」

「わかってる。気をつけるよ」そういつて片岡は、にやにや笑った。

三月十四日のホワイト・デー当日、俺は会社で片岡にマンションの合鍵を渡した。

「一応、部屋の掃除はしておいてやったぞ」

「ありがたい。その点はちょっと心配だったんだ」鍵と引き換えに、片岡は五千元札を財布から出した。「表札はどうした？」

「外しておいた。郵便はこないと思うけど、気をつけてくれ。それから、遅くとも朝の七時には出ていってくれよ。俺だって会社に行く支度があるんだからな」

「わかってる、わかってる。ええと、それから……」片岡は声を落とした。「あれはどこにある？」

「あれ？」

「あれだ。頼んでおいたじゃないか」奴は人差し指と親指で輪を作った。

「ああ、あれか」俺は頷いた。「テレビの横の、オーディオ・ラックの中にある。新品だから、いくつ使ったかは、すぐにわかるからな。一個五百円にしといてやる」

「わかった」

片岡は俺から離れると、さも仕事の話をしていたのだという顔をして、自分の席に戻っていった。

奴と入れ違いに、葉山広江が俺のところへやってきた。

「カワシマさん、製造部からメールが届いてました」そういつて机の上に封筒を置いた。彼女は本来の仕事以外に、簡単な雑用もしてくれるので、とても助かっている。ほかの部署の女子社員が、男女雇用機会均等法を盾に、絶対に雑用なんかはやらんぞという顔をしているのとは対照的だ。

たそ

「どうもありがとう」

礼をいうと、「いいえ」といつてにっこり微笑んでくれた。右の八重歯が、ちょっと覗くのが愛敬があつていい。こんなにかわいい子が、あの片岡なんかモノにされると思うと悔しかったが、その情景を想像すると興奮してしまうのも事実だった。

その夜、俺は車をファミリーレストランの駐車場に止め、その中で眠ることにした。俺の車はワゴンで、後部シートは常にフルフラットにしてある。毛布も常備しているので、なんとか寒さを凌ぐことはできるのだ。本当は一人旅をするためにこういう車を購入したのだが、その目的は一向に果たせず、こんなことに使っているのは、じつに情けなかった。

翌朝七時になると、俺は部屋に戻ってみた。外気とは正反対に、中の空気はまだ生暖かく、なんとなく湿った感じもあった。ここを出る前に、もう一ラウンドしたのだなと俺は推測した。

オーディオ・ラックの中を調べてみると、コンドームが二つ減っており、小さく折り畳んだ千

2

円札が代わりに入っていた。そしてゴミ箱の中は、丸めたティッシュでいっぱいだった。俺は葉山広江の顔を思い浮かべ、なんとなく切なくなったのだった。

あの夜以後、片岡は何度か部屋を貸してくれと頼みに来た。

「たまにはホテルを使ったらどうだ」

俺がいうと、奴は大げさに顔をしかめた。

「わかってねえな。女ってのは、贅沢な生き物なんだぜ。一度でもシティホテルなんか連れていったら、それが当然だと思っちまう。いいんだよ、おまえの部屋で充分だ。広江だって満足してるしな」

「彼女には誰の部屋だと説明してるんだ？」

「俺の部屋だといってあるよ。セカンドハウスみたいなものだってな。だから俺が不意の残業で遅くなるときなんか、彼女に鍵を渡して、先に部屋に入っておいてもらうこともあるんだ。でも心配しないでくれ。勝手に部屋のをいじらないよう、いつてあるから」

「当たり前だ」そういうながらも俺は鍵と引き換えに、五千円札を受け取った。

それから何日かして、違う奴が部屋を貸せといってきた。購買部の本田^{ほんだ}だった。片岡から聞いたのだという。今度はその二日後に総務部の中山^{なかやま}がやってきた。やはり情報源は片岡だった。

「金が入るんだからいいじゃないか。そのうちにジャック・レモンみたいに、いいことだってあ

るかもしれないぜ」

トイレで一緒になったとき、片岡はけろりとした顔でいった。

「ジャック・レモン？」

「『アパートの鍵貸します』っていう映画の話さ、この映画の中でジャック・レモンは、自分の部屋を会社の上司に貸すのさ。愛人との情事用にな。しかもその上司っていうのは一人じゃないんだぜ。複数の人間が、レモンの部屋の鍵を借りるために予約しているんだ。水曜日は部長、木曜日は課長っていう具合にさ。おかげで彼は会社ではたいした仕事もしていないのに、どんどん出世していくってわけ」

「おまえたちはヒラの新入社員じゃねえか」

「今はヒラだけどさ、おまえが恩を売った相手のなかに、出世する奴が出てくるかもしれないぜ」

「本当に出てくれりゃあいいけどな」

俺は便器の前で下半身を上下に振りながらいった。

部屋貸しを始めて三カ月ぐらい経ったある日、俺は例によってファミリーストランの駐車場で朝を迎えた。昨夜の利用客は片岡だ。その前は本田で、さらにその前が中山だった。商売繁盛である。おかげでこの三晩、俺は自分のベッドで寝ていなかった。

眠い目をこすりながら車を運転してアパートに戻ると、自分の部屋のドアを開けた。部屋の中は、これまた例によって生暖かい。朝からご苦労なもんだと思ったが、すぐにエアコンがつけっ